

小河さん親子が戦争遺跡を見学 鈴鹿の「戦争」を学んで長崎へ 8月「親子記者」として式典など取材

「いつでも、どこでも個別に対応します」と始めた戦争遺跡見学会に、鈴鹿市在住の小河正樹さん(56)、加奈さん(11)＝飯野小5年＝親子から申し込みがあり、市内に点在する戦争遺跡を見学した。小河さんは日本非核宣言自治体協議会(事務局・長崎市平和推進課)の「親子記者事業」に応募したところ抽選で当たり、事前の宿題として地元の戦争に関わる調査・取材を課された。8月、長崎を訪れ、全国9地区の親子がいっしょに被爆の実相を取材して親子記者新聞を作るという。

2人の案内は世話人の岩脇 彰、竹内 宏行、桐生 小百合 がつとめた。6月26日、鈴鹿海軍航空隊跡の桜の森公園からスタート。鈴鹿川をはさんで南東側に海軍施設、北西側に陸軍施設が広がる戦争遺跡地図のボードの前で話す。1942年12月、神戸町、白子町ほか12の村が合併して鈴鹿市が誕生した。軍によってつくられた全国初めての市。できたときから「へそ」がないといわれたが、「中心はある。鈴鹿海軍工廠だ」と国会で答弁している、と岩脇。公園ができる際10数m移動した航空隊の正門、番兵塔、航空隊当時のままの公園フェンス東側を流れる水路を見て回った。

車で鈴鹿海軍工廠へ向け移動。富士電機、AGFを通りながら「ここも第二鈴鹿海軍航空隊があったところ」と話すと、二人はその広大さに驚く。海軍工廠区域に入ってしばらくして「鈴鹿海軍工廠」の銘板がある大池町へ。さらにホンダ技研鈴鹿製作所西側の平野町にある火薬工場跡を見て回った。この一角は戦後まもなく石丸開拓団が入ったところで住宅があったため、ホンダは買収しなかった。さらに、工廠でつくった機銃の性能を確かめる発射場の着弾場跡(住吉町)などを見て回った。

7月2日は旧陸軍関係の施設。第一気象連隊の正門跡(県立石薬師高等学校入口)からスタート。同連隊は66万平方m、小学校66校分の広さ。

数km西側にある連隊の射撃練習場へ。8つ並ぶコの字型の銃座を見て、両側を山に囲まれた300m先の的近くまで行った。

続いて「陸軍道路」を通過して北伊勢飛行場跡へ。亀山市立川崎小学校の所に本部があり、当時の本部の正門がそのまま残っている。さらに第一航空軍教育隊の弾薬庫、当時の水路、建物の基礎部分、飛行機を隠す土製の掩体跡を見



て、国の登録文化財になっているコンクリート製掩体(鈴鹿市三畑町)で締めくくった。

小河さんは鈴鹿生まれの鈴鹿育ち。家も旧海軍施設の真中あたり。それなのに、軍都として誕生したこと、広大な軍需工場や飛行場が市内全域にあったことは「全く知らなかった」という。「鈴鹿サーキットのまち」くらいの認識だったといい、そのサーキットも元は海軍工場跡だったと聞いて驚く。二人は熱心にメモを取り、加奈さんは遺跡を次々に写真に収めた。何の変哲もない建物やコンクリートブロックを、話を聞きながら見て 70 数年前に想像を広げていた。

最後に加奈さんから「どうしてこういう活動をしているのですか」と質問があり、岩脇が「戦争を起こさせない。戦争の怖さを知るため。体験者が亡くなって話が聞けなくなっていくが、当時造られたものを見ることで戦争の怖さが伝わってくる」と話した。見学を終えた二人は「街の歴史は戦争の歴史でもあることを学びました」。

長崎市平和資料室によると、親子記者事業は 2008 年から始め、今年で 15 回目。北海道、東北、関東、中部、近畿、中国、四国、九州、沖縄の 9 地区から 1 組ずつ選ばれ、小河さん親子は中部の代表。8 月

8 日から 11 日まで長崎を訪れる。平和関連行事や施設、平和に取り組む人々などを取材し、学んだこと、感じたこと、これから取り組みたいことなどを記事にまとめ、タブロイド判 8 ページの親子記者新聞「ナガサキ・ピースタイム 15 号」を作成する。鈴鹿での取材も載せるという。

(文責：竹内 宏行)



鈴鹿市立石薬師小学校で出前授業(総合学習)

★日本の戦争の歴史を学ぶ ★学校近くの射撃場を見学

市民の会の世話人で戦争遺跡研究者、岩脇 彰さんが昨年に続き鈴鹿市立石薬師小学校で出前授業をしました。6 年生 2 クラス 41 人に、1 日目は教室で日本の戦争について話し、2 日目は学校近くの射撃練習場を見学しました。ロシアのウクライナ侵略があって戦争を身近に感じているようでした。子どもたちの感想を中心にまとめました。

うだる暑さの 6 月 29 日、冷房の効く音楽室で。8 月 6 日、8 月 9 日、8 月 15 日、1931 年～1945 年、1942 年。どういう日、どういう年だったか。子どもたちに考えてもらいながら話を進める。

◎ 感想文から

《8月6、9、15日》

「広島に原爆が落ちたのは、1945年8月6日。長崎は3日後の9日に原爆が落ちました。その約1週間後の8月15日に終戦を迎えました」

「あんな短期間で原爆が落とされてその後すぐに無条件降伏して戦争が終わったと知ってびっくりしました」

《1931年～1945年》

「じゅぎょうを受けて知ったことがいっぱいあります。一つ目は戦争が約15年間続いたことです。二つ目は中国と戦争していたこと。そして日本がいっぽうてきにこうげきしていたことです。原爆を落としてきたのがアメリカなので、ず～とアメリカと戦争していたと思ひこんでいました」

「今はロシアがウクライナに攻げきしているけど、むかしは日本が中国に攻げきしていたことが分かりました。ニュースで攻げきしている映像がながれているけど、日本も色々な国に攻げきしているから、それも忘れてはいけないと思いました」

「こんなに戦争が続いていたとは思いませんでした。戦争が始まったら、なかなか終わらないんだなと思いました」

「日本は中国と15年間戦っていたことを知ってとてもおどろきました。しかも、1941年12月8日に、他の国とも戦争をはじめたなんてびっくりしました」

《1942年①(12月1日、鈴鹿市の誕生)》

「すすか海軍こうしょうの人が戦争のためにつくった市だということを知りませんでした。今の『イオンモールすすか』と『ほんだぎけん』と『あさひかせい』のある場所が海軍の飛行機につける銃とその弾を作っていた場所だったと知ってすごくびっくりしました」

「2町12村を軍隊が日本で初めてまとめて鈴鹿市を創った。それほど軍が強かったんだろうなと思いました。」

《1942年②(12月1日、第一気象連隊の開隊)》

「第一、二、三、四気象連隊があって第一は石薬師にあるなんてびっくりしました。まさかのときの班集合場所だなんておどろきました」



「一番びっくりした事は石薬師町が戦争に深くかかわっていた、ということです。射撃場があったり、第一気象連隊があったり」

「戦争というのが実は身近な事で、(石薬師)中町などにあとがあるのにおどろきました。今、ウクライナとロシアで戦争をして苦しんでいる人々がたくさんいます。戦争というものをなくせたらいいなと思いました。一人の力で簡単に戦争を止めることはできません。だけれど戦争の事を知る人がふえれば……」



7月2日朝、学校から南西へ歩いて約10分、陸軍第一気象連隊の射撃練習場へ。説明を聞きながら、コの字のコンクリートブロックがそっくり残っている銃座を見たあと、的近くまで歩いた。



◎ 感想文から

「石薬師にこんな戦争遺跡があると聞いていなかったのだから、びっくりしました。そこには8個のコンクリートの台があって8人がいっせいに300発はなれたまとうてるということをおしえてもらいました」

「きれいに残っていたのですごいいいと思いました。お父さんやお母さんに話しても『そんな所あったん!? 知らなんだわ』と言われたので、私達が色々な人に伝えていけたらいいなと思います」

「改めて今回の遺跡見学によって石薬師町は戦争と深く関わっていたことが分かりました。草のない冬の時期に2つ、3つしかない的をこの目で見たいと思いました」

「公園として残したいと思いました。もっといろいろな人にこの戦争の跡を知ってどれだけ兵隊がかこくだったか知ってほしいからです」

「あんな場所に射撃場があるなんて歩いて通っていても分からないなと思いました。だから分かりやすい所に説明がかかっているかんばんみたいなのを立てるといいなと思いました」

「戦争遺跡をのこし、いいように活用するため小さな公園にしたいと思います。戦争についてあまり知らない大人や子供に戦争のこわさを知ってもらい、そのことをかたりついでそんなことを二度とおこさないようにするためです」

(文責：竹内 宏行)

戦争体験をめぐって

小津 安二郎 と 竹内 浩三 を語る

藤田 明 さんの総会記念講演(要旨)

《小津 安二郎》

来年に生誕 120 年を迎える 小津 安二郎 は 1903 年に東京・深川に生まれた。小学 4 年から三重県松阪町(当時)へ。松阪第二小学校に通い、宇治山田中学へ進んだ。神戸高商、名古屋高商を受験するが、いずれも不合格。入試があるのに、赴いた神戸や名古屋で映画館に入った、と日記にある。1 年浪人して三重師範も不合格。飯高の小学校で 1 年間、代用教員をつとめた。人格形成期にあたる 10 年間で三重で過ごしたわけで、その間に培ったものはのちの作品にもつながっていく。

23 年、父親が小津商店の支配人をしていた東京へ戻り、松竹に入社する。階級が伍長から始まる下士官になれるため志願して青山の近衛連隊に入隊し、1 年後に松竹へ戻った。27 年、監督に昇進したが、本籍地に近い久居連隊で 3 週間、毒ガスの訓練を受けた様子を日記に詳述。日中戦争の 37 年、召集され中国へ。上海、徐州の近く、武漢、南昌とひたすら行軍。39 年 3 月 20 日の日記には「毒ガス発射の件」を書いた。2 年近い日中戦争従軍のあと、43 年から軍の命令で監督としてシンガポールへ派遣された。日本の監督では一番長い戦争体験者だった。

戦後の作品について。世界的名作が多い。そんな中で、評論家の 四方田 犬彦 氏は、毒ガス作戦に参加していながら大事な問題を隠蔽した、と批判する。しかし、私はいろんな映画に反映されていると見たい。

「麦秋」「東京物語」の 原 節子 役の設定の仕方もだが、「東京暮色」(57 年)は深いところまで登場人物を描き、戦争の影を負っている。「秋刀魚の味」(62 年)では 2 人の戦友(加東 大介 と 笠 智衆)が海軍にいた時代を語り合う。

1963 年に亡くなった。生まれた 12 月 12 日、その日である。日中戦争下、南京に駐留していたこともあるが、そこで中国人の僧から「無」という書を揮毫してもらった。鎌倉の墓には「無」が刻まれている。その人と作風に戦争がもたらした象徴的な一字には違いない。



《竹内 浩三》

昨年が 竹内 浩三 の生誕 100 年だった。宇治山田に生まれ育ち、1939 年、宇治山田中学を卒業して日大専門部映画科に入る。42 年 9 月、半年間繰り上げて卒業、久居の連隊に入営した。約 1 年後、茨城県筑波に編成された部隊に転属。44 年末フィリピンへ。翌春バギオで戦死する。戦死公報が届いたのは 2 年後だった。

「戦死やあはれ 兵隊の死ぬるやあはれ……」で始まる「骨のうたふ」は入隊前の夏休みの作。梅川 文男 市長時代に松阪市が編んだ「ふるさとの風やー松阪市戦没兵士の手紙集」(66 年、三一新書)の巻頭に置かれ、全国に広まった。同市在住の姉、松島 こう子 さんの尽力もあって、だった。

繰り上げ卒業が決まったとき、中学時代からの親友、中井 利亮 らとガリ版刷りの同人誌「伊勢文学」を創刊、そこにいくつもの作品を発表した。戦後、中井(2002 年没)と松島さん(2014 年没)は協力して竹内の遺稿集『愚の旗』を自費出版した。それがのちの『全集』にまでつながる浩三ワールドの原点である。

松島さんは『よ、利亮』『おお 浩三』と彼岸にてまみゆるや汝は二十三歳」。中井氏の夫人、信子さんは「三人の子に 竹内 浩三 の『愚の旗』残す生還を得たる父編みし本」。と、それぞれ詠んでいる。

《そのほか詩歌系の人たち》

津出身の俳人、長谷川 素逝 は日中戦争に従軍。病身となって送還され、句集「砲車」で名声を得た。しかし、敗戦直後には「弟をかえせ」と詠む。鈴鹿在住だった歌人、山中 智恵子 は「青人草あまた殺してしづまりし天皇制の終わりを見なん」と昭和天皇挽歌。松阪の 錦 米次郎 は南京事件を思い出して詩に。久居の 黛 元男 は学徒動員で赴いた三菱重工のガラスをすべて壊した戦時中のできごとを「ある騒乱」という長い詩にした。宇治山田生まれの 川口 常孝 は湯きで死にそうな戦友に敵の女性が乳房を含ませて飲ませてくれた日中戦争での体験を長歌に残している。



ウクライナの問題が語ることを促した。
少しでも語り継がれるならと、時間オーバーに。
どうかお許しのほどを。



《略歴》1933 年東京生まれ。大戦末期に東北へ疎開、さらに津市へ疎開、以後、三重県人になる。長く高校で国語教師を務め、のち高田短大で教える。文学関係で新聞に連載。著書に「三重・文学を歩く」。映画関係のエッセーも多数。著書に「平野の思想 小津安二郎私論」。三重文学協会会長。

海軍の通信機

鈴鹿市が寄贈を受ける



乗

聞

2022.4.23 中日

(第3種郵便物認可)



受信機①と送信機②を積み上げた状態。鈴鹿市役所で

基地跡付近の同市江島地区の民家を解体中、昭和二十年代に発行された伊勢新聞に包まれた状態で見つかり、昨年暮れに市が手に入れた。

発足80周年 鈴鹿市が公開へ

受信機と送信機を積み上げると、縦五十センチ、横二十七センチ、奥行き二十六センチほど、きれいな状態の真空管通信機の写真を鑑定した齋藤さん

重さ50キログラム 一式陸攻用か

太平洋戦争中、海軍の航空機用に製造され、ほぼ完全な形で残っていた通信機が鈴鹿市に寄贈された。地元にあった海軍の航空基地（現鈴鹿医療科学大など）ゆかりの「戦争遺産」とみられる。戦後七十七年がたち、海軍史に詳しい長崎県文化振興課の齋藤義朗学芸員（四十九）は「実物が現存しているのは奇跡的」と話す。市が戦時中に発足して八十周年の今年、一般公開を検討する。（酒井直樹）

海軍の通信機あった

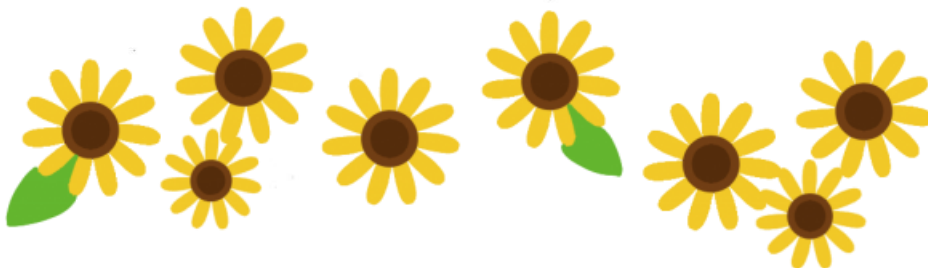
藤さんは「水晶製の部品も残っており、珍しい」と話す。重さは五十キログラムあり、型番などから十人近くが搭乗できる「一式陸上攻撃機」用の可能性が高い。

齋藤さんによると、終戦後に航空基地から連合国側に通信機や攻撃機が引き渡された記録が残っており、そのうちの一台とみられるという。物不足だった時代、こうした機器から部品を取り外して解体し、売却するなど再利用された。

市は戦争中の一九四二年（昭和十七）年十二月、軍部が主導し、十四町村が合併して誕生した。地元には航空基地のほか海軍工廠、陸軍の北伊勢飛行場といった軍事施設が立地。地域の約一割に上り「軍都」と呼ばれた。戦後、跡地にホンダ鈴鹿製作所などの製造業が進出し、市の基幹産業になっている。

節目の年に合わせて見つかった鈴鹿の歴史を物語る通信機について、市は近

く、ほこりで汚れた機器を清掃し、夏ごろに展示できないか検討する。通信機には、電線のようなアンテナ、発動機などの付属機材も一式がそろっており、組み立てに向けて調査する。



鈴鹿海軍航空隊ゆかりの通信機が民家に残っており、鈴鹿市に寄贈された。中日新聞によれば、受信機、送信機のほか、アンテナ、発動機など付属機材も一式そろっており、専門家は「実物が現存しているのは奇跡的」と話している。

中日新聞 2022年4月23日の記事から

鈴鹿海軍航空隊の格納庫部材

鈴鹿海軍航空隊の格納庫は3棟残っていましたが、惜しくも2011年の春に壊されました。そのごく一部の部材を大切に保存しています。ごく一部と言っても、大きくて重いものも多く、格納庫の規模がとてつもないものだったことが実感できます。

現在は会員の 森田 英治 さんのご厚意で、森田さんのご自宅倉庫（鈴鹿市安塚町）で保管して頂いています。昨年末から詳細調査を行い、部材リストが完成しました。概略をご紹介します。

○3枚の巨大な扉

部材の中で一番目を引くのは巨大な3枚の扉です。中央の扉は海軍マークの鍵のついた第5格納庫の通用口で高さ1.6mです。この扉は格納庫の横引き扉についていたもので、本体の横引き扉は残っている扉の4倍の高さでした。

残りの2枚は第3格納庫の北側と西側の出入口でした。どちらも高さ2mです。



○屋根の部材

NTTからの『引き渡し部材リスト』に「屋根部材」とされているものですが、どの部分に当たるかは不明です。かぎ状のものは長さ57cmで、天井のクレーンかも知れません。どれも第4格納庫の部材と考えられます。



○ガラス窓

ガラス窓は3枚あり、第4格納庫のものと考えられます。大きさはどれも1辺が92cmの正方形です。



○サッシ部材

1辺が168cmの正方形の格子部材で、第4格納庫西側面上部の「はめごろしサッシ」と考えられます。

○横引き扉

格納庫正面の横引き扉は幅7.5m、高さ7mの巨大なものです。第5格納庫の扉の上部1m（幅は適宜）を切り取って欲しいとNTTに要望して、要望通り切断して下さったのですが、大量の部材に分かれてしまいました。現状では組み立てるのは難しいですが、新しい技術や知見によって将来組み立てられるように、一つひとつの部材を大切に残したいと思います。なお、大半の部材は第5格納庫のものですが、第4格納庫の扉部材が混じっている可能性もあります。



①第5格納庫・横引き扉の支え部材

扉の次に重たい部材です。横引き扉を上で支えていた部材と考えられます。同じ部材が3つあり、どれも長さ1.5mです。



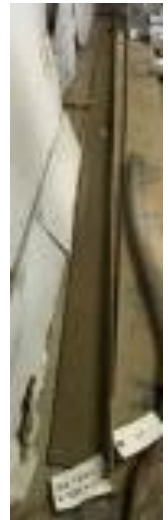
②第5格納庫・横引き扉の輪（レール）



扉の上部についていたリングで、上部のレールでこれが回ることで横引き扉が動いたのでしょうか。高さ77cm、横60cmで、これもかなり重いです。

③第5格納庫・横引き扉の上部レール

このレールを横引き扉が通っていました。長さが3.4mもあり、これも重たいです。①②③のような重いものが扉の上部についていたことに驚かされます。



④横引き扉の扉止め（上部）

上のレールの端で横引き扉を止めた部材です。第5格納庫の部材が2つ、残りの部材はどの格納庫か不明ですが、おそらく第5格納庫と考えられます。



⑤横引き扉の扉止め（下部）

下のレールの端で横引き扉を止めた部材です。上部の扉止めより大きく頑丈です。2つは第5格納庫のもの、残りの部材も第5格納庫の可能性が強いです。なお、下のレールはコンクリートに埋め込まれていたため保存できませんでした。



⑤第5格納庫・横引き扉の扉立て

「トビラ立」と書かれたカードがつけられた部材です。「トビラ立」の意味はよくわかりません。長さは84cmです。



⑥第5格納庫・横引き扉内部の中央部ストッパー

横引き扉が動かないように内側から鍵をかけます。ストッパーは10枚の横引き扉の中央部と、各扉の連結部にあり、中央部と連結部では形が違いました。これは中央部のストッパーです。



⑦第5格納庫・横引き扉内部の連結部ストッパー？

形状から横引き扉の連結部のストッパーではないかと考えられる部材です。



⑧第3格納庫・横引きドアの引き棒

第3格納庫を調査した時に、引き棒に墨で書かれた字があったので保存してもらいましたが、現在は墨が薄くなってほとんど読めない状態になっていて残念です。何と書いてあったかも不明です。木の棒の長さは2.3mです。



⑨その他の横引き扉の部材

他にも横引き扉の部材が37点あります。大半が第5格納庫のものと考えられますが、第4格納庫の部材が混入している可能性もあります。一部を紹介します。



○南京錠

南京錠は5つあります。このうち3つ(写真上)は第3格納庫の横引き扉内部につけられていたもので、どの扉のどの部分につけられていたのかが、調査時の写真でわかります。

残りの2つ(写真下)は、どこの南京錠か確証はないですが、第4格納庫の可能性が高いです。



○電気機器

残っている電気機器については、NTTが作って下さった「機器銘板等調査結果」という写真付きの詳細な報告書に大半が載っているので、どの格納庫のどの部分にあったものかをほぼ知ることができます。

ただ、2012年に私たちの会が腐食防止スプレーを塗ったために、肝心の銘板が読めなくなったり、元の色が失われたりしたのが残念です。



①第3格納庫の電気ボックス

第3格納庫の電気ボックスは4こあります。どれも設置されていた場所が詳細にわかります。

②第3格納庫の電気接続器



第3格納庫の電気接続器で、設置されていた場所もわかっています。

右側面プレートには「遮断器付 格納庫用」「昭和15年1月 横須賀海軍工廠造兵部」などの表記がありますが、錆止めスプレーのために色を喪失し、判読しづらくなっています。正面の赤いプレートの注意事項はよく読めます。



③第3格納庫外側の電気引込金具

第3格納庫の電気接続器で、格納庫正面の外側についていたものです。



④電灯

電灯は4つあり、このうち3つが第3格納庫のもので、長さは左の2本は1.5m 他は50cmです。



⑤第5格納庫の電気ボックスと非常ベル

電気ボックスには「電気時計(第五飛行機格納庫)」などが書かれた銘板がありますが、ペンキ塗装で読みにくくなっています。非常ベルはきれいな赤色と緑色をしていましたが、ペンキによって元の色が失われて残念です。



⑥木製電気ボックスとナショナルのスイッチ

どちらも「機器銘板等調査結果」に載っておらず、どの格納庫のものか不明ですが、第4格納庫の可能性が高いです。ナショナルは1927年からの社名で、赤色のロゴは松下電産のもので、



○第3格納庫の神棚

第3格納庫の北側中央の柱の上に設置されていました。木製で、縦71cm、横30cm、奥行き20cmです。



○第4格納庫北の通路にあった外構の金属蓋



蓋に海軍の錨マークが入っているので、調査した時に保存を要望したものです。水道管か何かの蓋で、高さが47cmあり、かなり重たいです。

これらの部材は、2011年3月の格納庫解体後に現地で保管された後、12年2月に鈴鹿市のご厚意で市の文化財倉庫(三宅町)に移動。その後、先述のように18年3月から森田英治さんの倉庫(安塚町)で保管されています。移動時に散逸して所在不明になっている部材が3つあることも確認できました。今回、

浅尾 悟 さんの協力も得て22年12月に詳細調査をおこなったことで、部材の全貌がわかり、一覧を作成できたのは、遅ればせながらの大きな一歩です。

森田さんのご厚意に応えるためにも、これら部材を保管・展示できる施設をできるだけ早く設置したいと思います。会員の皆さまのご協力をよろしくお願い致します。

戦争遺跡と同じように、実物資料を通して学ぶと、五感を通して具体的に戦争の事実がわかり、平和について考えることができます。これまでに会として、19年7月に親子見学会、同年11月に部材公開と講演会を開催して、市民に部材を見てもらいました。これからも部材から平和を学ぶ機会を作っていきます。希望される方があれば、会が進めている「いつでもどこでも見学会」として、森田さんと日程を調整しながら見学することも可能ですのでお問い合わせ下さい。 (文責 岩脇 彰)

